



才 三 卷 才 一 号

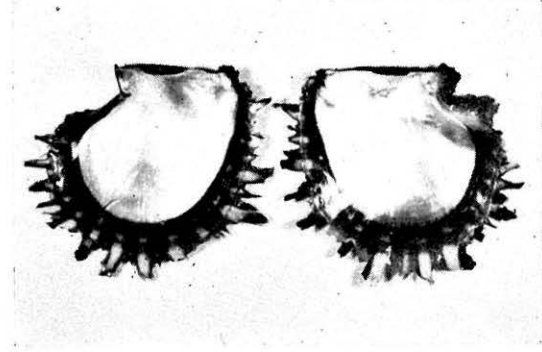
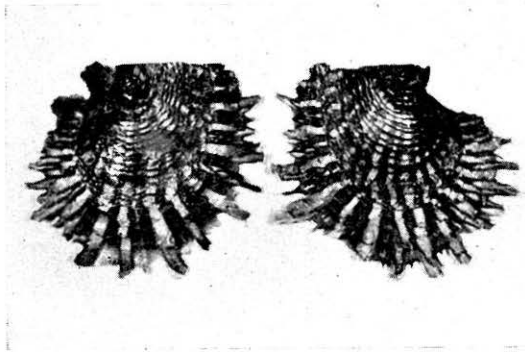
(Apr. 1958)

— 目 次 —

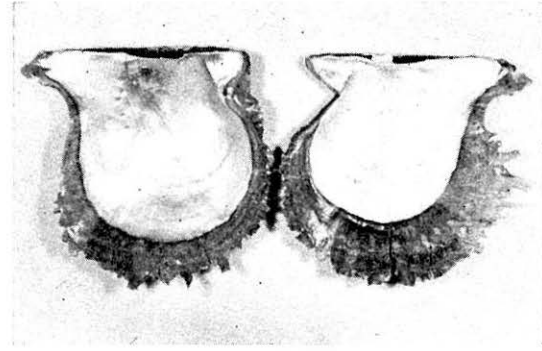
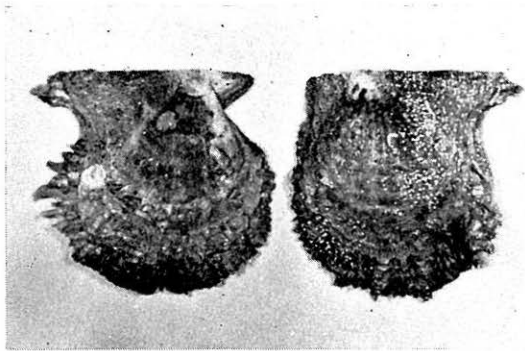
1. ピース貝の年齢差による真珠品質の差異について	山 口 一 登 ... 1
2. 中国、九州の真珠養殖業雑感 (1)	高 山 活 夫 ... 3
資 料	
真 珠 抄 録 (3) アコヤガイの生活力について	白 井 祥 平 ... 6
グラフ教室 (3) 年度別浜揚サイズ組成	 16
淡 水 真 珠 に つ い て	滋 賀 県 水 産 試 験 場 ... 16
官 庁 通 報	 18
英虞湾、五ヶ所湾の海況 (1月)	三 重 県 水 産 試 験 場 ... 29
〃 〃 (2月)	〃 ... 31
会 報	 20
雑 報	 26
潮 騒	 27
会 員 名 簿	 33

真珠研究会伊勢部会

真珠貝の各種①



Pinctada margaritifera (クロチョウガイ) 土佐産



Pinctada shimizuensis (シミズアコヤガイ) 清水産

ピース貝の年齢差による 真珠品質の差異について*

山口 一 登

(国立真珠研究所大村支所)

母貝の体内に将来真珠の中心部となる核を、他のアコヤガイの外套膜を小さく切つたピースと共に挿入した場合、核に密着しているピースが成長して、核の周囲をとりまき真珠袋を作り、それが真珠質を核の表面に分泌して、真珠が出来上ることは皆さん衆知のことと思います。即ち、真珠が出来上る為には、真珠質を分泌する真珠袋は絶対必要な又、重要なものであります。

言い換えれば、真珠袋の基となるピースは重要なものの一つであることは容易に判断出来ることであります。しかし、ピースの形状や、ピースの採取部位の影響等、二三の研究を除いては、まだ残念なことに研究結果が出ていないようであります。しかし、皆さん方当事者の立場から、多年の経験又、研究により、色々な考えをもつて、最も良好だと思われる方法でもつて作業を進められていることと思います。

筆者も昨年、ピースの状態と真珠品質との関係を取り上げて、試験を行つて見ました。試験の概要は、ピースの状態として、ピースを切り取る、ピース貝の年令的違いが真珠の色や巻きに及ぼす影響について、調べたものであります。以下その結果を述べて見たいと思います。

ピース貝として、3年ものと、5年ものを使用して6月中旬に1分2厘の核を「フクロ」と「ウカシ」の2個入れとして施術を実施し、金網籠に30個づゝ詰め、1.5米の深さに吊るして養成し、貝掃除は9月中旬に1回だけ行い、その時、金網籠も、一緒に取り換えました。浜揚げは、33年1月中旬で、養殖試験の期間は7ヶ月になります。

第1表 真珠1個当り平均重量 (gr)

挿核部 年 令	ふ く ろ				う か し				平均値
	ピンク ホワイト系	クリーム ゴールド系	グリー ン系	黒 系	ピンク ホワイト系	クリーム ゴールド系	グリー ン系	黒 系	
3 年もの	0.123	0.125	0.124	0.149	0.123	0.125	0.115	0.159	0.130
5 年もの	0.114	0.122	0.114	0.091	0.115	0.120	0.113	0.161	0.119

*「しんじゆ」第27号より

浜揚げされた真珠は、ピース貝の年令別に巻き（重量）と色について、比較検討を行いました。

真珠の巻きを表わすのに、ピース貝の年令差、挿核の位置及び、色の区分別に、天秤で計量し、1個当りの平均重量に換算して示すと、第1表のようになります。この表について、推計学的方法によるFI検定法を用いて、比較してみると、ピース貝の3年ものと、5年ものを使用して得た、真珠の平均重量に危険率1%で差が認められます。即ち、挿核施術の際に、3年ものムアコヤガイを、ピース貝として使用した方が5年ものを使つた時よりも、同一期間養殖した場合には、浜揚げされた、真珠は巻きが良好であると言えます。換言すれば、若いピース貝を用いて施術をすれば、巻きを早める結果になるということでありま

す。

次に、真珠の色については、直射光を避けて、肉眼的にピンク・ホワイト系統、クリーム・ゴールド系統、グリーン系統及び、黒系統の4通りに分類し、ピース貝の年令別にその比率を示すと第2表のようになります。

この表について、ピース貝の年令別に各系統の色の出て来る割合を χ^2 検定法

第2表 色 の 出 現 率

年 令 \ 色	ピ ン ク ホ ワ イ ト 系	ク リ ー ム ゴ ー ル ド 系	グ リ ー ン 系	黒 系	計
3 年 も の	41.6 %	41.8 %	11.3 %	5.3 %	100 %
5 年 も の	45.6 %	39.6 %	10.9 %	3.9 %	100 %

により、比較してみると、危険率5%で差は認められないと言う結果になります。即ち、ピース貝の年令が違つていても、浜揚げされた真珠はピンク・ホワイト系統、クリーム・ゴールド系統、グリーン系統及び、黒系統の色の出て来る割合が大体同じであつて、この試験材料の範囲では、ピース貝の何年ものを使つたか、何系統の色が多いなどと言うことは言えないようであります。

なお、この試験ではピースの採取位置（ピース色線を中心とした内外の割合、外套膜の前後等）は大体一樣になる様に注意してありますので、これによる影響は表われて来ないことになります。

この結果から、若いピース貝を使つて施術をおこなえば、或る程度巻きを早めることが出来るが、特にピンク・ホワイト系統の色が少いか、クリーム・ゴールド系統の色が多いとか言えないようであります。しかし、こゝで実際の真珠養殖においては、母貝とピース貝の年令は、大体、同一か又、違つていても、極く、接近した年令のものが使われていると思われますので、前号で御知らせした、母貝の年令とピース貝の年令の違いによつて、組合せを作り、検

討して見ますと、5年ものム母貝に、3年ものムピース貝を使用すれば、巻きは遅いが、ピンク・ホワイト系統の珠が多く出ることが、結果として、出て来ました。この様に、ピース貝の年令差は、巻きの遅速には影響するが、色については、その時の母貝の状態に影響されるものが大きいと、言えるようであります。

以上述べた、試験の結果については、皆さん方の今までの考えと多少喰違っているところも有ると思われますが、それについて、御意見等ありましたら、御寄せ下さるよう御願いたします。

中国、九州の真珠養殖業雑感 (1)*

高 山 活 夫

(国立真珠研究所)

2月下旬から2週間程広島県、長崎県、大分県の真珠養殖場を歩いて来ました。今度の旅行は真珠では新興県である広島県、大分県当局のお招きにより、長崎県は真珠研究会の横瀬幹事のお伴をして講演行脚の旅でしたが時間をみて出来るだけ現地も歩いてみました。2月27日、冬の最中ですが 暖い陽と心よい汽車の振動にうつらうつらし乍ら広島に着きましたが、その日は早速広島市の宇品港から県の取締船広島丸に乗つて広島湾一週を試みました。

広島湾と云つても英虞湾の10倍程もある広い湾ですがそのなかに昔の海軍兵学校のあつた江田島を始め、倉橋島や大小数多の島が散在しており、広島市内を流れる7つの河口を持つと云ふ大きな太田川が流れ込んでおる湾です。御承知の様に広島県は昔からカキの養殖では日本屈指の県ですが、そのカキ養殖の中心地帯は広島湾です。

この広島湾に昭和26年頃から地元の一部の人や三重県の真珠業者が真珠の養殖を始め、最近では岡山県界に到る迄の広島県沿岸諸所に新しい養殖場が設置されて急に脚光を帯びて来たわけです。現在の広島県での真珠養殖はこの広島湾と一これを県では西部海区と呼んでおりますが一、中部海区、東部海区一三原市、尾道市や福山市等を含めた岡山県境の方ですが一の3海区に散在しておりますが、どの海区も御承知の様に日本の多島海と呼ばれるだけに大小の島嶼が散在しており地形的にみればカキ、真珠の養殖には好の場所が随所に存在

* 1958年4月15日受理

しております。たゞこの地方は冬季水温が温いところで $10^{\circ}\sim 11^{\circ}\text{C}$ 程度ですから真珠の場合には避寒をしなければなりませんので広島県内だけで真珠養殖の経営が組み立てられない欠点があるわけです。それでも近くには豊後水道一愛媛県、大分県一を控えておりますからその地方と結び付けば真珠養殖が成り立つ事は丁度三重県の志摩地方が南島、紀州と結び付いて成り立っている事から容易に考えつく事です。この様な考え方は現実には行われており、而もそこから生産される真珠が優秀であると云ふ事から最近とみに注意を引く様になつたわけです。

現在広島県で真珠を経営している業者は14名で、その内訳は他県の経営者7名、漁協の自営1名、県内人の経営7、となつております。

この14名に對する県の免許漁場面積は約280万坪と云ふ事です。現在養殖しております貝数（作業貝）は約600万貝と云ふ事ですから筏1台（3,000貝とすると）に對する面積は1,400坪で三重の平坪50坪に對しては28倍と云ふ事になります。これは免許漁場の内には岩礁や地形の関係で相当使用の出来ない海面が多いと云ふ事ですし、実際に筏の浮べるところは狭いと云ふ事ですから、一概にこの数字だけで三重の場合と比較する事は無理がありますが、それでも使えない海面が周囲にそれだけある事はなんと云つても養殖的にはプラスにこそなれマイナスにはならぬと思つてよいでしょう。

せゝこましい三重を見馴れた私には余りにも開放的な広島の養殖場をみて驚いた次第ですが一すぐに私はこれがほんとの真珠養殖の姿ではないかと、驚き且つうらやんだ気持はすぐに、日本にもまだこの様な姿で真珠養殖場が保存されている事を心強くも又有難くも感じたわけです。

この地方の真珠の品質のよい事の第一の理由は、この様に漁場を裕福に使用している点にあると云つてもよいでしょう。勿論その前提としてはこの海が真珠の養成に適している事一具体的には化粧巻き漁場として適していると云ふ事です。

この化粧巻き漁場として適していると云ふ事は塩分濃度の面でみて飽く迄も沿岸性の性格をかなり持つてしていると云ふ事です。このことは反面水温の点で冬期低温となつて避寒を要すると云ふ事になります。このことは一面広島県地元の小業者がなかなか経済的に伸び悩んでいる原因ともなつて居るのです。それは創業日なほ浅い彼等には避寒漁場を持つ余裕が充分にないからです。又彼等に経済的の重圧を加えている問題は県内に母貝が生産されないの、總て他県へ依存していると云う事です。この点については県当局や県水産試験場や業者の協力で漸く昨年頃から採苗の見透しがつき始めた事です。この採苗技術は三

重の場合と異なる点はありませんけれども、広島海面が開放的で潮流が早い個所が多いので、採苗には採苗時期の問題よりはむしろ着生漁場の選定に目標がおかれなければならぬわけですが、これも漸くその場所の選定に目鼻がついて来たわけです。又潮流のおそい場所でも比重が低いので下層での採苗一具体的には夏期躍層下での採苗が有効であると云う事も判つて来たことです。この様にして採苗事業の第一難関は突破した様ですからおそらく県内自給の日もそう遠い事ではないでしょう。それにしても母貝養成にも避寒漁場の問題がつきまとうわけですが、彼等の悲願はこの県内産の採苗養成母貝が多少でも耐寒性を帯びたものにならないだらうかと云う事です。このことは私にもよく判りませんが、もしそういう貝が出来たとしたら生物学的にも面白い事ですし、又産業的にも役立つわけですから彼等のためにこの悲願の成就する事を祈つた次第です。

滞在中の1日は地元業者の方々と色々懇談を行いました、白紙から出発した人達が、如何に苦労されたかを知りますと共にその人達の技術も今日では決して子供ではないと云う事を感じました。技術研究に対する熱情は三重の人達に優るとも劣っておりませんからやがては広島に適合した技術の出来上る日も近い事でしょう。そして県当局の指導方針も今日以上に広島県の真珠は拡大しない一飽く迄も真珠は良質のものでなければならぬ一このためには三重の様な密殖の二ノ舞はしたくないと云う事で、一応現在の免許を限度として拡大を抑制しております。

この様な考え方の県の下で熱心な業者が、現状の経済的の面では欠点とされている避寒漁場のない広島県の水域は本質的には化粧巻き漁場としての優秀な面を持つている事を考えますと、ほんとによい品質の真珠の出来る中心が段々と西に移つて行くのではないかと云う感じを抱き乍ら3月2日長崎県へ向いました。(続)

広島県下真珠養殖場の海況の1例 (32年)

区別 月 別 場 所	水						温					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
広島湾	11.3	10.1	10.2	13.5	16.0	18.9	22.5	24.2	23.3	21.8	18.9	15.0
中部海区	12.0	10.4	10.2	12.7	15.6	18.2	22.4	25.2	24.7	22.1	19.6	16.0
東部海区	10.0	8.8	9.4	13.0	16.2	19.8	23.0	26.4	25.0	21.8	18.3	13.7
	比						重					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
広島湾	23.94	24.06	24.36	23.59	23.81	23.78	19.89	21.37	22.53	23.01	23.22	23.36
中部海区	24.40	24.55	24.62	24.33	24.41	24.32	23.20	23.73	23.98	23.71	24.09	24.07
東部海区	24.53	24.31	24.29	24.12	23.64	23.83	22.64	22.69	22.61	22.50	22.80	23.00

(註) 記録は水深5尺、12時

真 珠 抄 録

(3) アコヤガイの生活力について

白 井 祥 平

○小林新二郎, 1950: アコヤ貝を冬期の室温にさらした場合の

斃死率について (真珠の研究, 第1巻第2号)

当年稚貝、2年稚貝、3~4年貝を室温 (3.5~10.5°C) にさらした場合、12時間迄は斃死が見られない。18時間でも殆んど、10%以内である。24時間では3~4年貝、2年稚貝が80%斃死率を示したが、稚貝が最も強かつた。しかし、3日後、10日後、1ヶ月後の結果を見ると、逆に稚貝が最も死が斃多く、3~4年貝が少い。それ故、本当の被害程度は、1ヶ月たてなければ判らない。

稚貝、成貝共に冬期の空中露出安全時間は12時間以内であろう (編者註)

○小林新二郎, 1950: アコヤ貝活動の日週性、美麗なる真珠質を分泌する

貝類に仮称真珠酵素の存在を予想して (真珠の研究, 第1巻第2号)

1. 貝殻運動の内、平滑筋による閉殻運動には、春季に於いては日出直後、乃至それより3~4時間内に緊張の極となり、それより急に弛緩して、日入前後にその極に達し、その後再び緊張して日出に至るという変化を認めた。
2. 体液のPH (酸性、アルカリ性の度合) の1日の変化は日出直後、乃至それより3~4時間の頃と日入前後の2回の谷が認められた。

アコヤガイの生活現象として、日出後と、日入前後に大きな変化が認められるので、この時間を考慮に入れて作業する事は重要な事であろう。 (編者註)

○本城市次郎, 1948: アコヤ貝の刺戟生理学的研究I. 光反応

(生理生態第2巻第2号)

アコヤガイは、光が増加する場合には何等の反応がないが、光が減少する時には反応を起し、急激なる減少の場合には著しく疲労する。そして光の減少が少い時は外套膜を収縮するのみで、大きな減少の場合は完全に閉殻する。この現象は光が15~30%減少した時に起るから、アコヤ

貝は光の減少に對して相当敏感であると言える。

○渡部哲光, 1952: 挿核手術直後の作業貝斃死率に及ぼす

季節水温の影響について(真珠の研究、第2巻第3号)

1. 春 20°C 迄の斃死率は最も多い。これは冬期の衰弱より恢復後間もない為と思われる。
2. $23^{\circ}\sim 25^{\circ}\text{C}$ の間は、秋、夏共に最も少い。これはこの温度が貝類に最適温度であるためであろう。
3. 其の他の温度に於いては、1、2の中間の率を示すが、卵抜きの影響も考えられる。

○渡部哲光, 1950: 真珠の巻きに及ぼす環境の影響(I)

(真珠の研究、第1巻第1号)

1. 小林博士によれば 貝殻に穴をあけて、そこが新しい貝殻で塞がれる速度は水温に大いに影響され、 13°C 以下になると全く塞がれなくなる。又其の他の活動も 13°C 以下で停止する。
2. 比重が一定の場合、分泌量は垂下層水温から 13°C を引いた値に正比例する。
3. 卵巢内に於いては肝臓、筋肉の間よりも分泌機能が増大する。

○白井祥平, 1955: 小湊産アコヤガイの品種に関する研究 (II)

(東京水産大学水産生物研究会短報、第2巻第2号)

1. 足糸分泌を見ると大貝(殻長 5cm 以上)は1日平均1本であるに反し、中貝($3\sim 5\text{cm}$)、小貝(3cm 未満)では2本であり、何れの個体でも3本以上分泌する個体は極めて少い。
それ故、1日に於ける足糸の分泌数は、貝の生活力判定の一指標となる事が出来る。
2. 空中にさらした場合の斃死率は、 4cm 未満の貝では $30\sim 35$ 時間で全部斃死する。そして、これ位の大きさでは、貝の大小に影響がなく、斃死したので 35 時間をもつて空气中(夏期 28°C)の生存限界と認められる。
 5cm 以上の貝では 47 時間迄生存し得る事を認めた。例外的に 60 時間生存した個体もあつた。

○小竹子之助, 1955: アコヤガイ増殖に関する研究 III

細菌によるアコヤ貝異常斃死について (2)

(日本水産学会誌、第20巻第11号)

1. 細菌に對する感染から見ると、細菌が体表面に附着した場合は罹病せ

ず、体腔内に傷をつけて移植した場合には感染し、それ故手術後に感染が多い。

2. 季節的な消長は春期(水温 $23\sim 28^{\circ}\text{C}$)、秋期 ($21\sim 19^{\circ}\text{C}$) 及び冬期 ($18\sim 14^{\circ}\text{C}$) には斃死しない。

これより、水温が 20°C 附近に上昇する時期に 斃死が起る事が判明したが、これは乃ち温度上昇に基く貝の生活力の衰弱に原因している。貝の生活力の強い時には病原菌を接種しても罹病しない。

又仮に貝の低抗力によつて初期症状が回復しても、袋に挿入された玉は腐つた筋肉を巻き込んで黒珠になるので、水温の上昇する時期には生活力に注意する。

3. 予防としては、水の流通のよい所で水深5m以深の所に垂下する。

○川本信之、元木英輔, 1954: アコヤガイの生理的研究I

心臓搏動に對する稀釈海水の影響(日本水産学会誌、第20巻第3号)

心臓を取り出した場合では比重の小さい海水程、搏動は早く停止し、比重1.0030で1時間、1.0040で5~6時間、1.0050~1.0070に於いて24時間以上であつた。

又貝のまゝでは、逆に稀釈度の少いもの(比重の大なもの)程早く開殻し、1.0070のものが最も早く、より薄い海水のものが38~39時間も閉殻し続けた(生存した)。

これは、通常海水より、稀釈海水に移された時に、その差が大きい程滲透圧の刺激が大きく、貝は強く閉めて水の浸入を防ぐからで、降雨による低比重の場合の斃死の問題が解決される。

低比重になつた場合、相当ひどい時よりも少しの時の方が斃死が起りやすいという事が考えられる。(編者註)

○国立真珠研究所, 1955: 真珠養殖に関するシンポジウム記録

足利千枝: 貝の栄養をグリコーゲンの含有量から調べたが、貝では貝柱に斃最も多く、時期としては11月より4月迄が多く、6、7月が最も少い。

1月貝と8月貝とを比べると、8月貝は俗に「水貝」という様に固形成分が少く、グリコーゲンが非常に少い。それ故、グリコーゲン量が排卵時の indicator と見られ、排卵の準備のために蓄積されたグリコーゲンは他のものに变化するので減少すると考える。

老貝と幼貝とを比べると、グリコーゲンと脂肪の変化に大きな差があるのであまり抑制しすぎて老貝の状態にすれば必ずあとで巻きがわるいのでよくない事である。

○小林新二郎, 1951: アコヤ貝介殻表面に於ける

輪狀薄片形成の週期性(真珠の研究, 第1巻第3号)

1. 冬期水温が 13°C になると一齊に貝殻の形成は止り、それが春迄平均 160日(浜島湾) 続く。 15°C の水温で冬眠から醒めるが、春の貝殻形成の再開には個体差が著しく、5月下旬にならぬと大部分の貝の形成は始まらぬ。この頃の水温は 18°C である。

それ故、 18°C 以上の水温があれば春の挿核作業を始めてもよい。

2. 貝殻の薄片の巾の揃っている様な貝は恐らく体内の生理週期も規則的で、珠の巻きも良いであろう。

大貝より小貝の方が、この点から見るとよい母貝と言えよう。

○小林新二郎, 1951: アコヤ貝に於ける足糸分泌力の年変化

生活力の簡易判定法(真珠の研究, 第2巻第1.2号)

1. 貝の附着力を見ると、最高水温の8月よりも、9月の方が何れの大きさの貝でも大きい。
2. 稚貝では塩分濃度10%以下になると、附着力は著しく低下し、8%以下では足糸分泌が殆んど停止する。
3. 真珠形成力及び足糸分泌力は最高の水温時をすぎた下降期に最高の値を示す。
4. この事は秋期に於けるグリコーゲンの蓄積その他により、夫々分泌液中の成分、例えばグリコプロテイドの粘性にも変化を生じ、これによって附着力が増加するのではなからうか。
5. 冬期低水温に過ぎるか、異常環境におかれた時は春の恢復が遅れ、明らかに生活力が弱まつたと判断出来る。
6. それ故、足糸の分泌は直接的に真珠質分泌力と関係し、その指標となる。

○結城了伍、小林新二郎, 1951: アコヤ貝稚貝雜録(II)

(真珠の研究, 第2巻第1.2号)

アコヤ貝稚貝は塩分濃度23.5~20.1%迄は附着に長時間を要してもほぼ完全に附着するか、17.3%に至つて急激に生活力は衰え、14.3%以下にあつては全く附着力を失つてしまう。

尚、13.5%以上の海水ならば、24時間浸漬されて附着力が完全に或いは殆んど衰えていても平常海水に戻せば完全に恢復する。

しかし、10.4~10.8%の場合は10~30%の斃死を見るので、も早、危険な

条件と見なければならぬ。

○結城了伍, 1951 : アコヤ貝の鰓の纖毛運動

I 低塩分濃度の影響

II 硫酸銅に対する抵抗力

III マーキュロクロームの作用

(真珠の研究、第2巻第1.2号)

1. 鰓の纖毛運動から見た、低塩分濃度の影響はアコヤガイの適応塩分は20%以上で、ほぼ完全に恢復し得る限界は13%以上である。
2. 纖毛運動が完全に停止するのは 9.6%である。
3. 13.2%の海水では6時間浸漬されても、平常海水に戻せば24時間後に恢復する。
4. 赤潮発生の場合、從來迄硫酸銅 (CuSO_4) を用いられたが、これが及ぼす影響を調べると、大体安全と見られる濃度は 5×10^{-5} 以下の濃度に6時間以内及び 10^{-6} 以下に24時間以内の浸漬の場合である。
尾田方七氏によれば 10^{-6} の硫酸銅溶液に對しては 12時間の浸漬に對し無害であると述べているが鰓片の場合はやゝ影響がある。
5. 挿核手術の時にピース挿入にしばしばマーキュロクローム (赤チン) が用いられているが、この影響を見るに10%溶液に20秒浸漬した鰓片は24時間後に匍行力は完全に失われ、組織は崩潰していた。
尚、同じ10%に10秒浸漬した場合、24時間後に組織の崩潰は殆んど認めなかつたが、纖毛運動は著しく減少した。
5%溶液に10秒つけた場合にも、完全な恢復は認められず、2%の場合でも2時間後に運動は停止した。
それ故、多くの業者の行つているマーキュロ使用は良くなく、かえつて生体染色用の色素を用いるべきであると提唱する。

○森主一, 1953 : アコヤ貝の日週期活動

(Venus, XV (1~4))

アコヤ貝の真珠層は1日に1層作られると考えられるが、これは母貝にみられる明瞭な生理、生態学的な日週期現象 (酸素消費量、体内グリコーゲン量及び移動距離の変化に於ける) により裏付けられる。

○貝の生活力から見た作業について

5月頃より挿核が出来るが、この頃に行つたものは、冬眠後、未だ力が恢復していないために、トロトロ巻き始めその内に放卵期になつて中止す

る様になるので、巻きから見れば悪く、それよりも放卵後7月中旬より8月にかけて始める方が一息に巻くので光沢もよく、好成績である。

(M真珠工場長談)

○森主一, 1954: 低圧O₂海水中的アコヤガイの呼吸 (予報)
(Venus, XV (1~4))

酸素消費の割合は外洋水の酸素量が、0.5cc/lになる迄はほぼ正常に行われ、それ以下になると急に減少する。

一般に貝の生活条件がわるくなつた時には杆晶体 (腸内にある糸コンニャク様のもの) は溶解消失する事が知られている。

○高山活夫, 1957: 昨年度真珠貝斃死についての研究 (本誌第1号)

○高山活夫, 1956: 真珠貝の夏期斃死とその対策について
(全国真珠漁協真珠資料第1号)

1. 冷 潮

8~6°Cに於いて、600~700時間で斃死が始まり、その後300時間で全滅。

2. 淡 水

梅雨期、台風期に被害が起る。

比重1.0070の場合40時間で開殻。

3. 夏期斃死の状態

7月下旬より認められ8月上旬が最もひどく中旬になり減少。

作業貝では手術直後のものに多く、平均10~30%、最高70%で、一般作業貝は5~25%の斃死率がある。

母貝では1~10%で、年令別では老貝に多く若貝に少い。挿入した核のサイズ別では大玉の方が多く、小玉の方が斃死が少い。

漁場別では、一般に湾奥部の方が多い (潮の流通のわるい所)。一般に漁場の浅い個所。

比重では、14.50になるとかなり運動がにぶり、12.00になると80%減退する。9.00になると僅かに動く程度で6.00では停止する。

一般に貝殻は高い比重に強いものである。

水温では生活条件に最もいいのが23~25°Cであり、27~28°C附近が境界になる。

30°C以上の高水温では異常を来す事になる。

真珠貝の警戒水温としては28°C附近である。

真珠貝の体成分の季節的变化を見ると

成熟期 2月～5月

生殖期 6月～8月

肥大期 9月～1月

であり、8月はグリコーゲンが最も少く衰弱している。老貝は若貝に比してグリコーゲン量が少くて生活力が弱いと言える。

○青木駿, 1957: 農業の真珠貝に対する影響 (本誌第1号)

農業のエンドリンがアコヤガイに対する毒性を調べた結果、満1年位のものが一番強く、致死限界は海水稀釈濃度で10万倍位であり、年をとつた満3～4年貝はそれに比べて弱く、100万倍位が致死限界であつた。

採苗しつつある稚貝では年をとつたものより強い。

現在一般の田畑に散布されている濃度では大丈夫であると考える。

○小川良徳、伊藤勝千代, 1955: 七尾湾に於ける真珠貝資源の

利用に関する研究 (日本海区水産研究年報、第2号)

アコヤ貝の輸送は50時間以内であれば春、夏、秋でもあまり危険がない事が明らかになつた。

又、冬期低水温による斃死は水温 8°C 以下の場合には注意を要する。

○小川良徳, 1952: アコヤ貝の空中活力について (予報)

(医学と生物学、第23巻第3号)

七尾湾の2年貝を利用して室温 ($16.5\sim 9.2^{\circ}\text{C}$) に露出した場合の斃死率について調べた。

12時間露出のものは、10日後に4%、24時間のものが20日後に2%の斃死を見たのみで大丈夫であつた。

○小林新二郎、東畑正敬, 1948: アコヤ貝の冬期の生活力について(1). (2)

(日本水産学会誌、第14巻第4号)

アコヤ貝は、 7°C 以下に於いては全く閉殻、 $7\sim 13^{\circ}\text{C}$ に於いては殆んど閉殻し、時々微動、 $13\sim 15^{\circ}\text{C}$ に於いてはやゝ活動し、 15°C 以上に於いて活潑に運動する。

従つて 13°C の水温が貝殻運動の限界水温である。

○川本信之, 1957: アコヤ介の比重に対する抵抗力について (本誌第3号)

アコヤガイは低比重に對して非常に弱いものである。

貝が斃死する理由は低比重海水に入つた時の貝の体液の氷点降下度が急激

に変化し従つて、体液と体外との圧力の差が大きくなつて、だんだん体外の圧力に近い状態になるため、体組織が破壊されて行くので斃死するわけである。

急に低比重の水に入つた場合は外囲水の浸入を防ぐので、比較的強いが、天然の如く除々に薄まつて行く場合には、閉殻作用がにぶく、体内に低比重海水が入り、上の状態が起つて斃死するので注意が必要である。

それ故、人為的にショックを与えて閉殻させる方法が考えられる。

○片田清次, 1957 : 遊離塩素のアコヤガイその他の二三の浮游仔貝に及ぼす影響 (国立真珠研究所報告、第2号)

工場排水中の遊離塩素の害はアコヤガイ、アサリ、エガイには殆んど同じ程度でイガイはやゝ強かつた。

6時間接触による濃度はイガイ5.4ppm、アコヤガイ3.9ppm、アサリ、エガイ3.2ppmであつた。

○小林博, 1955 : 工場排水中に含まれる炭酸カルシウムの浮游粒子がアコヤガイに及ぼす影響 (水産講習所研究報告、第5巻第3号)

1. 工場排水中の炭酸カルシウムの粒子は明らかに貝の酸素消費量を低下させ、特に6号炭カルでは濃度 $\frac{1}{4}$ より著しく低下した。
2. 鰓の繊毛運動は5号炭カルでは濃度1に於いて6号炭カルでは、濃度 $\frac{1}{4}$ 以上に於いて停止した。
3. 貝殻の開閉運動は、5、8号炭カルでは濃度1に於いて著しく閉殻した。
4. 致死時間は、6号炭カルの場合濃度1、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ で夫々3.5、4.5、8日であつた。

8号の場合、濃度1、 $\frac{1}{2}$ で夫々14、9日であつた。

5. 以上の結果より遊離炭酸カルシウムの粒子はアコヤガイの鰓に障害を与え呼吸作用を阻害し、死に致らしめる事が判つた。

○小林博、松井淳平, 1953 : アコヤガイの環境変化に對する抵抗性の研究 (1) 鰓の繊毛運動に就いて (水産講習所研究報告、第3巻第2号)

1. 水温との関係より、アコヤガイの生活適温は12~23°C、最適水温は23°C附近と考える。
2. P.Hに於いては、酸性に弱く、6.3では42分で停止し、逆にアルカリには強くかえつて促進的であつた。

3. 低塩分濃度では、 $S=22.6\%$ から低下し始め、 13.0% で、停止した。
4. 染色剤、メチレン、ブリュー（青色）では $10^{-6} \sim 10^{-7}$ モルの濃度溶液中で70%促進された。

○小林博, 1955 : アコヤガイの環境変化に対する抵抗性の研究

(2) 心臓の搏動について (水産講習所研究報告、第4巻第1号)

1. 心臓の搏動停止温度及び規則正しさから見てアコヤガイの生活適温は $12 \sim 24^{\circ}\text{C}$ 附近迄と考える。
2. P.Hの影響は6.4以下より著しい影響をうけ増大した場合は著しい変化が見られぬ。
乃ち酸性に弱い。
3. 稀釈海水の影響は急に作用させた場合は50%稀釈で、除々に薄めた場合は30%で搏動は停止した。

○小林博, 1955 : アコヤガイの環境変化に対する抵抗性の研究

(3) 衝撃に対する介殻の強さ (水産講習所研究報告第4巻第1号)

1. 貝殻に重錘を落してこわれる限界を調べた結果大きさと、力の強さとは $6.0 \sim 7.0\text{cm}$ の大きさ迄は正比例している。
2. 成長して強くなるのは貝殻中のカルシウムの量が増加するためではなく、単に殻の厚さが増加するからである。
3. 輸送に当つては殻高 $6.0 \sim 7.0\text{cm}$ 以上から行えば損失は少い。

○山口正男, 1955 : アコヤガイの養殖とその真珠 (水産増殖叢書No.9)

第3章 生 理、生 態

(2) 環境条件と生活力

a) 比 重

比較的高鹹に適する生物で、最適比重は $1.020 \sim 1.025$ である。

比重に対するアコヤガイの生活力 (死亡に至る日数)

年 令	比 重				
	1.000	1.005	1.010	1.030	1.035
満1年貝	3 日	3.7日	3.8日	8.3日	4.5日
満2年貝	3	3.7	3.3	8.3	4.5
満3年貝	3	3.7	3.3	4.7	5.7
満4年貝	3	3.7	3.3	8.3	3.5
平 均	3 日	3.7	3.5	7.4	4.6

(三重水試1902)

b) 空 中 活 力

空気中に放置した場合は、高年令の方が強い。
冬期より夏期の方が死は早い。

アコヤガイの空中活力

年 令	条 件		
	直射光線の所	蔭 所	湿気を給与した
満 1 年 貝	3. 3 日	5. 2 日	7. 3 日
満 2 年 貝	3. 3	5. 2	7. 3
満 3 年 貝	4. 0	6. 3	6. 3
満 4 年 貝	4. 0	5. 7	7. 5
平 均	3. 7	5. 6	7. 1

(三重水試 1902)

c) 水 温

8°C以下の低水温が停滞すると死に至る。

三重水試の調査結果によると

- (1) 7°Cで118時間、8°Cで39時間経過後、各年貝は斃死を始めた。
- (2) 8°C539時間、7°C195時間 経過後、各年貝が 斃死を 始め、その後
5°Cで32時間6°C224時間、7°C96時間を経て 斃死は増加し、14日間
で全滅した。
- (3) 8°C99時間、7°C454時間、6°C52時間経過後斃死を始め、その後、
7°C220時間、6°C4時間経過後全滅した。

足糸の附着率は小林博士*によれば、水温とほぼ平行し、稚貝では塩素量10%以下になると附着力が急に低下し、8%以下では停止する。
又、結城**によれば足糸分泌は昼間より夜間が多く、日没後に始まり日出後に終る。

○足利千枝, 1947: アコヤガイの生化学的研究

(第3報) 貝肉の部位別並びに雌雄別によるグリコーゲン含有量

(日本農芸化学会誌, 第23巻第2冊)

グリコーゲン量の最も多いのは貝柱であり、夏期では最も含有量が少くなるが、外套膜、鰓、足では年中は一定である。冬期貝肉表面が白くなるのはグリコーゲンの蓄積によるもので、貝柱中の量も最も多い。

*小林新二郎, 1951: アコヤガイに於ける足糸分泌力の年変化 (真珠の研究、第2巻第1. 2号)

**結城了伍, 1952: アコヤガイの足糸分泌に見られる日週期活動 (1)

(真珠の研究、第2巻第4号)

○川本信之, 1954 : アコヤガイの生理的研究II

稀釈海水中に於ける介体液の氷点降下度に就いて

(水産学会誌、第20巻第4号)

通常、アコヤガイの体液と周辺海水の氷点降下度はほぼ一致している。実験によれば低比重海水に入れたものほど生活力を維持しているが、これは以前による貝殻の閉殻が完全であつた為で、やゝ低比重の場合は防禦不足により閉殻能力を失い斃死する事が判つた。天然に於いては除々に稀釈せられるので、急な変化の結果と異なると思う。

淡 水 真 珠 に つ い て

過日、朝日新聞に掲載された、琵琶湖産イケチヨウガイの養殖真珠について、滋賀県水産試験場より通知があつたので発表する。

新聞によると、14mmの真球真珠との事であつたが、現在迄の研究結果では、直径10.5mm、重量1,585mg (0.42匁) のものが最大で養殖4ヶ年である。

色、質共に優良で今後の見透しは明るいが、アコヤ貝真珠養殖から見れば、14mmという珠は驚異と考えられていたが、やはり新聞の誤報で、10.5mmなれば考え得る事であつた。

(33.4.4. 白井記)

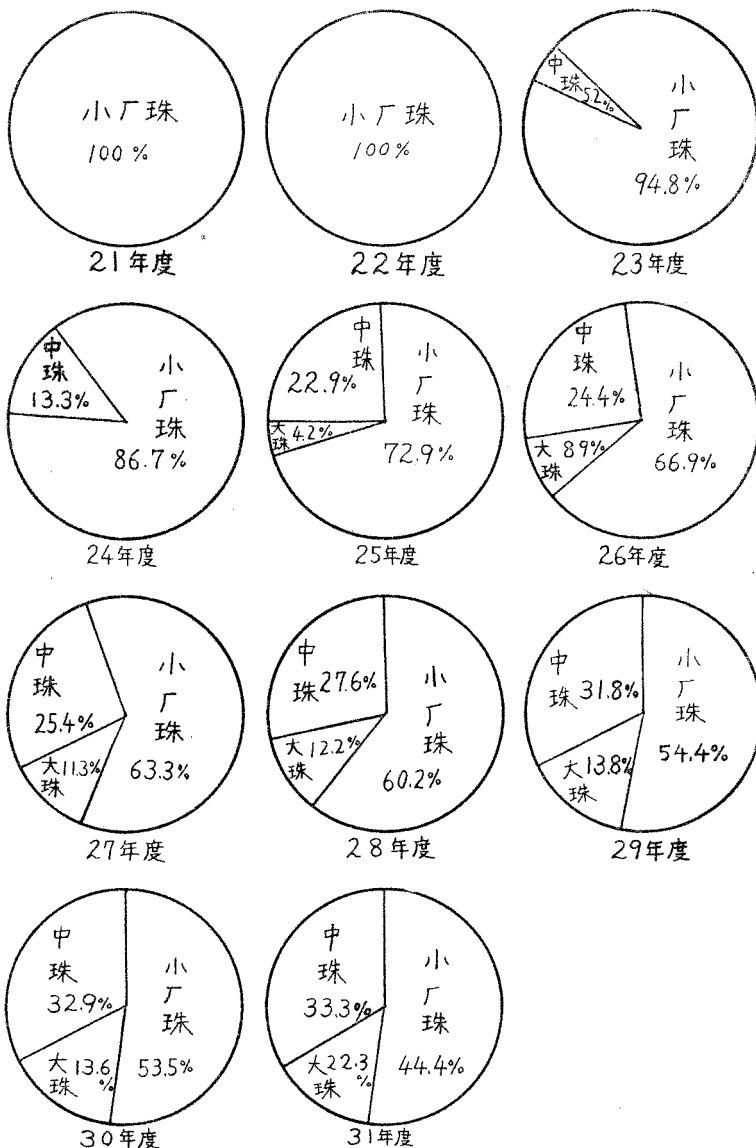
グ ラ フ 教 室 (3)

年度別浜揚サイズ組成

終戦後、真珠養殖も復活して年々規模も増大し、技術も発達して来たが、1年に作られる真珠のサイズの数量はどの様に変化したであろうか。その昔は6,7mm位が大珠であり、限度とされていたが、今日では12mm迄出せる様になっている。

この推移を水産庁の統計からグラフにして皆様に紹介する事にしました。本年度より行われる実態調査と関聯して有益な資料となるであろう。

年度別浜揚サイズ組成



官 庁 通 報

真珠業者にとつて知つておかねばならない通告は、殆んど関係主要機関にのみされておるので、これを広く一般に認知して頂くために、適時通報を紹介する事にした。
今回は、主として関心の高い税に関するものを二、三取りあげた。 (編輯局)

水産庁漁政部長殿

昭和32年10月31日

国税庁直税部長

粗悪真珠の廃棄処分に伴う法人税及び所得税の取扱について
標題のことについては、下記により取り扱うことゝしましたから御了承下さい
記

1. 真珠業者の取扱

- 1) 真珠業者が日本真珠輸出組合に對して、粗悪真珠を供出した場合においては、その養殖費用などの原価は当該供出した粗悪真珠について受けるべき補償金の額が確定するまでは、これを損金又は必要な経費に算入しないものとする。
- 2) 真珠業者が、組合に支出した特別賦課金又は処分協力費の規定に基く検査手数料の引下げ分に相当する金額は、これを支出した日の属する事業年度又は年分の損金又は必要な経費に算入するものとする。
- 3) 真珠業者が受け入れる補償金は、その支払の確定した日の属する事業年度、又は年分の益金又は事業所得の総収入金額に算入するものとする。
但し、真珠業者が粗悪真珠の供出に当り、交付を受けるべき補償金をあらかじめ辞退したことが明らかである時は、当初から交付が行われなかつたものとし、贈与等としては取り扱わないものとする。

2. 日本真珠輸出組合の取扱

初事業年度においては、仮受整理の問題は生じないことゝなるはずであるが、次事業年度以降については、粗悪真珠の供出見込特別賦課金等の収入見込及び、廃棄計画等が明らかでないので具体的事実が発生した際に別途協議することゝしたい。

国税庁直税部長殿

昭和32年9月12日

水産庁漁政部長

粗悪真珠の輸出禁止とその廃棄処分に伴う課税措置について

真珠の輸出振興の見地から品質向上及び価格維持を図るため、輸出入取引法に基き、昭和32年4月1日輸出組合員の協定により、又、4月16日付通産省令第54号により夫々粗悪真珠の輸出業上措置がとられ、これに伴う行政措置として、

粗悪真珠（500貫）の集荷処分を行わせるとともに、真珠検査規則の一部を改正して、検査手数料「5円」を「2円50銭」に引下げ、その分を組合員及び非組合員を問わず、輸出組合に譲出せしめ、粗悪真珠補償資金の一部に充当せしめるよう指導しているものであるが、上記集荷処分などに関連して下記事項につき税制面からの特別措置を認められるよう特別の御配慮を願いたい。

なお、輸出組合の事業計画の概要並びに関係資料を別紙のとおり添附する。

記

1. 真珠業者の場合

1) 粗悪真珠の供出について

輸出可能な粗悪真珠は製品として記帳（総平均法使用）されているため供出による分を棚卸差損として経理する。

2) 供出真珠に対する補償金の受入について

目的と内容からみて販売でないので、個人は雑所得、法人は雑収入とする。但し、供出をして補償金の受入をしないものは、所得又は差金扱としない。

2. 日本真珠輸出組合の場合

輸出組合は真珠輸出検査手数料の引下げ相当分を特別賦課金（組合員）、処分協力費（非組合員）として徴収するが、これらは粗悪真珠の供出者に対する補償のための資金として受入使用（処分のための人件、事務費を含む）するものであるので、翌事業年度の補償に充当するため仮受金に整理も益金に計上しなかつた時はこれを認める。

全国真珠養殖漁業協同組合長殿

昭和33年2月17日

伊勢税務署長

むき貝等に対する物品税の取扱について

平素より物品税事務について、いろいろと協力有難うございます。

くず真珠を用いたむき貝、かん詰、標本額等の取扱については、従来1個当たり100以下のものを課税しないことに取り扱っておりましたが、今後は下記のとおり、これら物品の取扱が明確になりましたから関係業者を御指導下されたくお願いいたします。

記

1. むき貝、真珠のかん詰

現在、販売されている程度のむき貝、真珠のかん詰は、くず真珠と認められますから課税されません。

2. 真珠標本額

真珠標本額は、その使用されている真珠が例えくず珠であつても、真珠としての装飾的価値を主眼としたものと認められるので「真珠を用いた製品」として1個または1組につき1,200円以上のものは課税されます。

国 税 局 長 殿

昭和32年10月4日

国 税 庁 長 官

真珠養殖業者の有する施術員等に對する価格変動準備金勘定の設定について

真珠養殖業者が、その有する稚貝及び母貝を原材料又は貯藏品とし、施術員を仕掛品等として経理し、これらについて価格変動準備金、勘定を設定した場合には、その計算を認めることとしたから、今後処理するものから、これにより取り扱われたい。

会 報

1. 32年度総会

32年度の総会は、3月26日午前10時より、伊勢市真珠会館3階に於いて開催された。

当日は雨天であるにかゝらず旧年度の総締くまりであり、又新年度の発足でもあるために多数の参加者を見る事が出来た。

司会は山本文栄氏によつて進められ、先ず議長として同じく山本氏が指名され、議事は進行された。

議 題

1) 経過報告 常任幹事 横 瀬 寛 一 氏
昨年度研究会の成果の報告が中村代表幹事欠席のため代理で説明された。

2) 新年度事業計画 常任幹事 横 瀬 寛 一 氏
昨年1年間の事業を審議して運営委員会で検討されたテーマを発表した。

(1) 真珠養殖の実態調査

発足当時から懸案であつた実態調査は、本年より行ふ事になり、実態調査委員会を設立し、県庁、全国漁協と打合せを行い、実施の第一歩を踏み出す事になった。

(2) 研究会組織の再編成

研究会の組織も運営も、この1年でようやく固まりつつあり、昨秋より漁協の職員も協力をして、事実上の雑務を取りあつかっている。ので新年度から、正式に漁協とタイアップして行おうべく、別紙の如く機構を充実した。

(3) 試験養殖

県庁水産課、水試、研究所により進められている本年度の試験養殖に研究会も参加する事は既に発表された通りであるが、主として母貝、核の斡旋、施術、漁場調査、管理等の主要な面を担当する事になり、既に準備が進められている。

(4) 経営研究分科会の設立

研究会の分科会として研究面に基礎研究分科会があつて成果は毎号の誌上に発表されているが、新年度より新たに、経営面の分科会を設立し、金融、税務、労働、P.R 等の問題について毎月例会を持ち、漁協の専門の方々にも御協力を願う事になった。

(担当 久米村)

(5) 真珠に関する文献集の刊行。

三重大学岡田教授より提案のあつた内外の文献を集録する事業の第一歩として発表されている。文献資料の題目丈をカードに作製する事になり、直ちに取りかかる事になった。

(担当 白井)

(6) 真珠に関する有益な資料の複製配布

逐次行う予定であるが 差し当つて会報、1,2号の発行部数が少なかった為に欠号となつているので、合併号として 300 部を複製する事になった。それ故、1,2合併号を希望せられる方は至急申込んで頂き度い。

但し、32年度会費納入の方で部数不足のために御送り出来なかつた方は無料で御送り致しますが、その他の場合は実費を申し受けます。

(担当 白井)

(7) 海洋調査分科会

従来迄の観測地点を検討して、新しい観測網を作製する。

又、漸次和歌山、四国、瀬戸内海方面に拡張し資料を集める。夏期、秋期に於ける真珠貝斃死対策として昨年より行つている「吹き流し」による注意予報を行い、且、多徳島の外に間崎に増設する。

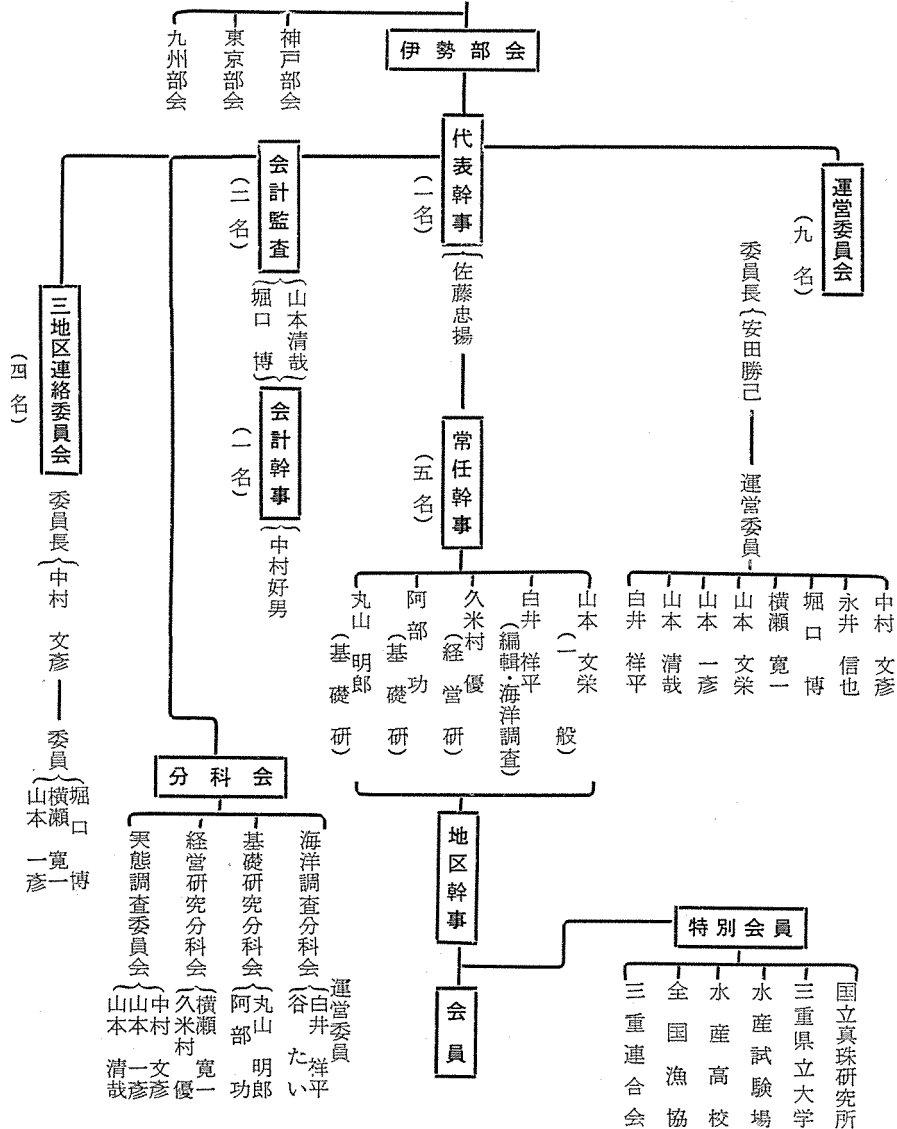
尚、名称を分科会として海洋調査分科会と改める。

(担当 白井)

研究会機構並びに33年度新役員

日本真珠振興会

真 珠 研 究 会



(8) 生産面に於ける広報活動

P.Rを東京のP.R分科会の協力のもとに行う。 (担当 横瀬)

(9) 会員の親睦活動

会員相互の親睦を目的として、野球大会(5月)、運動会(11月)、
リクリエーションを行う (担当 丸山)

(10) 基礎研究分科会の充実

毎月開催している例会は主として技術研究面の人々によつて構成
されているので、今後は賢島の国立真珠研究所で開催する事になつ
た。 (担当 阿部、丸山)

(質 問)

高山 活夫：例会は毎月行われているが集る人員も少く、発表資料も少くな
つて困難になつてきたので、隔月に行つては如何、研究会は隔月にし
て、その間の月に基礎研究を行いたい。

中村 忠臣：毎月開く事は幹部の方でも重荷であろう。

出席率の多少と開会とは切り離して考える必要がある。

熱意のある人は毎月でも聞きにきたいと思うので出来れば毎月行つて
貰いたい。

横瀬 寛一：各地区の幹事の当番制として幹部丈でなく、会員の人々の手で
例会を開く様にして行きたい。

中村：常任幹事に比して地区幹事の熱意が足りないと思う。

各地区持ち廻りとして横の連絡を作りたい。

高山：現在の例会をもつと広くしてそれらの事も例会の中で皆で討議し
て行きたい。研究会の仕事として、資料を内部的に蓄積する事と、養
殖業者を指導啓蒙して行くという二つの方法があり、後者の方がより
重要である。

会 員：研究会が地方に出てもつと業者に喰い込んでもらいたい。忙しく
なると出て来れないので各地区で研究会を行つてもらいたい。

横瀬：五ヶ所で行つた例でも解るが、人手が少ないので各地区幹事さえや
つてくれれば研究会の方でも可能だ

この事については審議の結果、偶数月(4月、6月、8月……)は伊勢の真珠会
館にて 奇数月(5月、7月、9月……)は各地区に於いて例会を持つ事にした。
そして地区に於いて行つた時は、その地区の声や資料を収集し、発表する事
にしたいので充分用意願いたい。地区は追つて発表する。

3) 役 員 改 選

役員改選の結果、別表の通り新役員が任命された。

尚地区幹事は各々地区にて検討の末決定された。

2. 3月研究発表会

総会の後、引続いて行われた。

議 題

- 1) 的矢湾に於ける真珠養殖の実態及び仕上漁場をして海況について

的矢養蠔研究所 阿 山 多 喜 也 氏

伊雑浦のせき止めに反対する有力な科学的資料としての長年に亘る
佐藤所長の報告がまとまつたので公聴会形式で講演を予定していた所、
急病との事で不能になつたので止むなく論文の概要説明を阿山氏にお
願ひした。

- 2) 四国、九州地区の真珠養殖場視察報告

国立真珠研究所長 高 山 活 夫 氏

其の後、32年度をかえりみて及び来年度の希望という題について座談会が行
われ、午後4時開会した。

出 席 者

国立真珠研究所：高 山、丹 下、沢 田

県庁水産課：平 賀

水産試験場：木 村、山 口、福 島

勸銀伊勢支店長：

水 産 高 校：伊 藤

御 木 本 真 珠：井 村、谷

帝 国 真 珠：橋 本、島 野、西 川（間崎）

真 和 真 珠：作 田、浜 際

南 勢 真 珠：南（布施田）

浜 文 真 珠：浜 口（片田）

山 勝 真 珠：関、坂 上

み つ わ 真 珠：荻 須（阿曾）

堀 口 真 珠：吉 川（的矢）

富 士 真 珠：笹 原（的矢） 茶 木（浜島）

片 田 中 学 校：茶 木

佐 藤 真 珠：佐 藤（文）、阿 山

岩 常 真 珠：中 島（間崎）

み の る 真 珠：中 村（鵜方）

極 東 養 殖：郡(賢島)

速 水 真 珠：速 水(引本)

長岡産業有限公司 (鳥羽)

覚 田 真 珠：松 本(片田)

船 越 漁 協：上 野 (南勢)

曾 根 町 漁 協：酒 井 (尾鷲)

九 鬼 漁 協：川 上

山 川、柴 原(楠)、井上、中 村(浜島)、大 畑(神明)、

竹 内(相賀)、村 田、中 山、木 下(鳥羽)、平 本、中 村(忠)

上 野(南海)、島 村(賢島)、山 口(的矢)、浜 野(片田)

西 井、山 本、橋 川、幸 田、林、幸田(隆)、山 本(勲)、

林 (五ヶ所)、浜 口、中 村(礫)、山 本、川 口、川 口(公)(宿)

城、北 村、石 谷、石 谷(敏)、竹 内、小 島 (迫間)、

井 上(越賀)、大 森(布施田)、糸 川(船越)、

三 橋、西 崎(鵜方)、浜 地(神前)、山 本(三ヶ所)、

宮 崎(尾鷲)、市 丸(真鶴)

研 究 会：佐 藤、横 瀬、山 本(一)、山 本(文)、

堀 口

全 国 漁 協：中 村、阿 部、丸 山、久米村、白 井、谷

3. 海洋調査分科会

第2回の海洋調査分科会は総会当日正午に行われた。

当日は、委員長である三重大学坂本市太郎氏が欠席の為に新年度の計画は次回に行う事にして差し当つての問題のみを検討した。

議 題

- 1) 試験養殖についての試験地設定の打ち合せ。
- 2) 夏、秋期の母貝斃死対策の為に(吹流し)予報を多徳島の他に間崎に設置する。
- 3) 県外養殖地の観測網を設置する。
- 4) 海況調査を充実するために電気水温計とポケット流速計各1台を購入する。
- 5) 次の分科会は4月に開催し、海況報告は冬期分をまとめて4月中に発行する。

雑 報

1. 交換資料について

研究会発行の会報は、交換資料として寄贈していますが、3月中に資料を恵贈頂いたものは、下記の通りであります。

今後共何卒、資料収集に御援助頂きたく宜敷くお願い申し上げます。

国立真珠研究所大村支所「しんじゅ」9. 10. 12. 13. 15. 16.

17. 19. 20. 21. 22. 24. 25. 26. 27 各一冊

西海区水産研究所研究報告 第14号.

熊本県水産試験場：羊角湾養殖真珠異常斃死原因調査報告書。

水産研究会：真珠養殖経営体の概況。

三重県水産課：昭和32年度、真珠及び真珠貝養殖用筏登録台数審査表。

2. 研究発表会について

従来迄殆んど伊勢の真珠会館に於いて行つて来ましたが、毎月開催というのは幹部役員の重荷であるのと、出席される方が限定しているので、本年は新しい試みとして、隔月毎に各地区に出かけて開催する事にしました。

その場合、各地区幹事の方々の御協力を頂きたく、会場、研究発表、討論等も御用意願う事になりますが、本来の主旨である養殖業者のための研究会という事に関しては、これが最も良い方法でありますので、実施して行きたいと思います。

月は奇数月、乃ち、5. 7. 9. 11. 1月の5回になりますので、各地区で幹旋して頂ける所は御連絡下さい。

3. 会員の研究について

真珠養殖も段々科学的になり、研究を除外しては優良な品質を維持出来なくなっているが、研究会の会員の方々は、唯講師の話をきく丈でなく、何等かの問題をもつて、1年間観察して、発表する様にしてはどうであろうか。

研究というものとは決して、難かしいものでなく、手近な例を調べる方が直接役立つものになるので、その結果を多くの方々に批判してもらつて、より良い方法を見出す事こそ進歩になるわけである。

それ故、是非今年は実行して頂きたい。又、問題や方法に関する相談は、どんな事でもお受け致しますからお申し出下さい。

4. 資料配布について

第8号で既に真珠に関するパンフレットの頒布について通知したが、その

他について記しておきます。

水 温 計 (1/10目盛)	1 本	3 8 0 円
比 重 計 (A)	〃	2 1 0 円
〃 (B)	〃	3 2 0 円
〃 (C)	〃	2 1 0 円

真珠祭記念アルバム 1 冊 6 5 0 円

コマース、ジャパン(真珠)英文 1 冊 7 0 0 円

アコヤ貝解剖図 (原色判)

且つて、三重県水産試験場から発行されたものであるが、解剖図としては唯一であり、非常に役立つものであるので、研究会として複製配布を計画しています。

しかし部数がまとまらねば印刷出来ませんので、希望者は是非お申し込み下さい。価格は約150円の見込みです。

5. 海洋観測について

冬期の間はとかく観測がし難い所があつたと思いますが、今年は冷潮による斃死も相当にあつた様で、是非冬のデータも来年度の冬の予防対策の為に集計しておきたいと思いますので、至急冬の分を御送り下さい。冬期分はまとめて4月下旬に編輯する予定です。

(尚欠測した所も通知をお願いします)



潮

騒

研究会の運営は、漁場に離れた伊勢で行われており、而も、役員が養殖部門に直接タッチしていないため全てに亘つて、本来の意に沿わぬ事も起るであろう。それ故、この会報を通じていろいろな意見や、不満を提出して頂きたく、今日より新設した。

(編 輯 局)

○先づ第一に申し述べるのは僭越であるが、研究会の全員が恩恵を浴しているこの会報が発行難に陥っているという事は、非常に残念な事である。元来、この様な誌を作るのは決して編輯にたづさわっているものゝ義務ではなく、会員全員によるものであり、編輯子は単に、美しく作るのに努力する丈でよいわけである。而るに、現在では原稿が全くなく、止むなく編輯関係者(養殖に

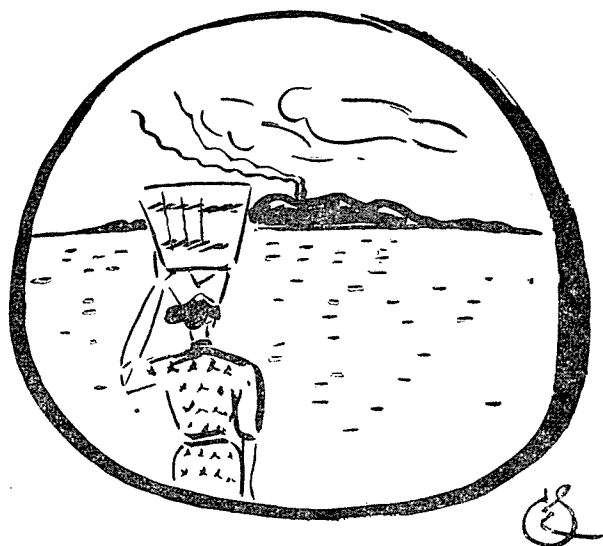
直接たづさわっていない) が理論的な事をかいたり、他の発行物を引っぱり出したりしているのが現状である。一部には座右の書としていつもひもどいている……とか、会報が来るのが楽しみであるとか……或いは編輯子の記したものが非常に役立つから続けてほしい……とさえ言われる方々があるのに、今月は原稿がないから取り止める……とは言えないのである。

一体、世間のこういつた技術者や機関誌は、原稿が多すぎて印刷費の高い今日、とても間に合わぬ……ひどいになると 1年後に発表出来たというものがあるのが実際である。その点、会報の場合は、どうやら予算も苦しい乍ら何とか出来るし、手ぐすね引いて原稿を待っているのに、さっぱり来ない。

依頼しても送つてくれぬと……あつては、何おか言わんや……である。毎号 24日頃に新鮮なインクの香をもつた会報が事務所に運び込まれるときの感じは……あゝとうとう会報になった……とほつとため息が出ると同時にもう次の切迫いくばくもないのが苦になるのである。

決して、こんな原稿が……こんなお粗末なものが……とは申しません……否申す筈がないのですから何卒第三巻も無事終迄出るべく一層の御協力をお願い致します。

(伊勢市真珠会館内 編輯局)



英 虞 湾 観 測 表

1958年1月20日施行

三重県水産試験場

英 虞 湾 の 概 況

水温は例年に比較すると湾奥部は9°C前後で変化は認められないが湾口部の沿岸水がかなり低温を示し、御座沖の湾口附近では11°C前後で3°~4°C低温となつている塩素量も水温同様湾口部が低く18.80%前後、湾奥部では18.50%で大体安定して居る。

酸素量の飽和度は湾全般に飽和状態で99%前後を示している。

Planktonは先月より減少しているが比較的湾奥部に多く外洋水の影響のある区域では年間の最小値を示し従つて組成的には硅藻類衰退が目立ち、湾口より湾奥に遷移している。主なもので Skeletonema, Chaetoceros は先月と変りはない。

地 点		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
地 名		浜 島	迫 子	矢 取	湾 口	越 賀	間 崎	四 ツ 島	布 施 田	片 田	立 神	神 明	鶴 方	多 徳	奥 神 明
時 刻		9.20	9.40	9.50	10.00	10.18	10.30	10.48	10.58	11.10	11.40	13.30	13.50	14.07	—
水 温 °C	0m	10.7	11.35	11.0	10.9	10.8	10.6	9.3	9.2	8.8	8.5	10.1	10.4	10.2	9.7
	2m	10.7	11.4	11.1	11.2	10.8	10.7	9.3	9.2	8.8	8.4	10.1	10.6	10.2	10.9
	5m	10.7	11.2	11.2	11.3	10.8	10.8	9.3	9.2	8.9	8.7	10.1	10.5	10.3	10.6
	B	10.4	11.7	11.0	12.3	11.2	11.2	9.8	9.2	9.1	8.7	10.3	10.6	11.0	—
塩 素 量 %	0m	18.77	18.86	18.92	18.87	18.79	18.71	18.49	18.55	18.42	18.11	18.54	18.54	18.71	18.41
	2m	18.77	18.93	18.92	18.89	18.77	18.74	18.49	18.43	18.47	18.17	18.51	18.58	18.57	18.43
	5m	18.84	18.88	18.89	18.91	18.77	18.71	18.56	18.41	18.42	18.29	18.51	18.58	18.60	18.49
	B	18.84	18.88	18.85	19.11	18.92	18.84	18.57	18.51	18.54	18.20	18.10	18.64	18.71	—
酸 素 cc/L	0m	—	6.22	—	6.54	—	6.30	—	6.35	6.50	6.88	6.40	6.46	6.44	—
	2m	6.15	6.20	—	6.74	—	6.25	—	6.57	6.54	6.93	6.44	6.50	6.49	—
	5m	6.10	6.18	—	6.95	—	6.24	—	6.21	6.58	6.67	6.42	6.51	6.79	—
	B	6.22	6.22	—	6.03	—	6.14	—	6.57	6.50	6.72	6.47	6.43	6.25	—
量 飽 和 度 %	0m	—	99.5	—	103.6	—	98.1	—	96.1	98.3	102.2	98.8	100.6	99.4	—
	2m	96.4	99.2	—	106.8	—	97.4	—	99.4	98.9	103.0	99.4	101.2	100.2	—
	5m	95.6	98.9	—	95.2	—	98.1	—	93.9	99.6	99.9	99.1	101.4	105.8	—
	B	97.5	99.5	—	98.4	—	97.3	—	99.4	98.3	99.9	100.2	100.2	99.3	—
P. H	0m	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2m	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	5m	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Plankton沈澱量 cc/m ³		15.0	14.5	7.9	4.0	16.3	22.9	22.4	33.4	44.0	9.7	42.2	87.1	69.5	13.2
水 深	m	10.9	14.0	8	16.3	28.0	20.8	16.2	19.0	10.2	7.9	7.9	9.0	25.0	5.0
水 色		8	6	8~9	8	8	8	9	9	9	9	9	9	9	10
透 明 度	m	7.6	9.3	8	9.9	10.6	8.7	7.3	8.2	8.2	7.8	8.2	7.3	10	5.0
波 浪	ウネリ	1-0	1-0	1-0	2-0	1-0	2-0	2-0	1-0	1-0	2-0	1-0	2-0	2-0	2-0
気 温	°C	6.2	6.4	5.9	6.6	6.8	—	6.4	7.5	7.5	7.4	8.0	8.3	8.5	8.3
風 向 力		NW-1	NW-1	N-2	NW-3	NW-2	N-3	NW-3	NNW-2	NNW-2	NW-3	WNW-2	NW-3	NW-2	W-2
雲 量		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
天 気		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B

五ヶ所湾観測表

1958年1月28日施行 (三重県水産試験場)

◎ 五ヶ所湾の概況

水温は英虞湾同様湾口部
がかなり低温で例年より
3°~4°C 前後降下してい
る塩素量は雨水の流入に
より表面水は低下し、8.
31%を示しているところ
もあるが好天と共に回復
するものと思われる。

地 点		101	102	103	104	105	106	107
地 名		湾 口	宿	迫 間	内 瀬	船 越	五ヶ所	神 原
時 刻		10.40	11.10	13.30	12.46	12.35	11.58	12.10
水 温 °C	0 m	10.9	10.3	9.5	9.8	10.1	10.2	9.9
	2 m	11.1	10.5	10.6	11.2	11.0	11.6	11.7
	5 m	12.4	11.9	11.0	11.8	11.6	11.1	11.5
	B	13.2	13.0	11.1	11.8	12.1	12.1	12.1
塩 素 量 ‰	0 m	18.65	18.36	17.63	17.17	17.02	12.83	8.31
	2 m	18.71	18.55	18.53	18.66	18.65	18.83	18.79
	5 m	19.01	18.92	18.56	18.92	18.87	18.85	18.42
	B	19.32	19.13	18.59	18.96	18.96	19.03	19.00
プ ラ ン ク ト ン 沈 殿 量 cc/m ³		35.2	—	6.6	—	—	—	15.8
水 深	m	20.0<	2.0<	18.5	11.0	20.0	17.0	18.3
水 色		6	6	6	6	6	6	6
透 明 度	m	5.0	4.0	5.3	4.8	6.0	6.5	5.5
波 浪 ウ ネ リ		1—2	1—1	1—0	0—0	0—0	0—1	0—0
気 温	°C	7.8	8.6	12.0	14.7	11.0	10.6	10.8
風 向 力		NE—1	N—1	S—1	0—0	0—0	0—0	0—0
雲 量		10	7	4	4	6	8	8
天 気		C	B C	B C	B C	B C	C	C

英 虞 湾 観 測 表

1958年2月24,25日施行

三重県水産試験場

英 虞 湾 の 概 況

水温は前回観測と殆んど全般に同水温で湾口附近の一部が1℃前後高温となつている。昨年同期と比べると前回同様湾奥部は9℃前後で変化なく湾口部は2℃低温を示している。

塩素量は前回同程度で18.5%で安定している。

酸素飽和度も100%以上で過飽和状態である。

水素イオン濃度8.3は例年並で変化は認められない。

Planktonについては五ヶ所湾に於て冬期大増殖の末期に当り、量的に近來の最大値が表われているが殆んど *Chaetoceros subsecandus*, *Ch. constrictus* で占められている。

英虞湾に於ては、先月に反対で湾奥部に少く、外洋水の影響のある区域に多い。

主なものは、*Chaetoceros constrictus* であるが五ヶ所湾のそれとは大部形態が異つていた。

地 点		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
地 名		浜 島	迫 子	矢 取	湾 口	越 賀	間 崎	四ッ島	布施田	片 田	立 神	神 明	鶴 方	多 徳	奥 神 明
時 刻		10.40	11.30	13.30	14.30	15.25	14.10	14.28	14.05	12.56	11.07	10.37	9.20	16.40	10.00
水 温 ℃	0m	10.78	10.20	10.28	12.03	9.92	10.54	10.47	9.38	9.41	9.57	9.73	9.29	10.19	9.99
	2m	10.60	10.63	12.02	12.22	9.90	10.57	9.51	9.35	9.19	9.53	9.72	9.88	10.10	10.00
	5m	10.10	11.30	12.20	13.28	11.70	10.34	9.51	9.38	9.09	9.62	9.70	9.92	9.94	9.98
	底	9.85	11.18	12.18	10.62	10.10	10.09	9.60	9.44	9.37	9.69	9.83	9.94	9.93	9.99
塩 素 量 %	0m	18.58	18.65	18.73	18.75	18.47	18.64	18.50	18.42	18.28	18.55	18.53	18.41	18.61	18.44
	2m	18.73	18.94	18.75	18.75	18.47	18.73	18.50	18.42	18.28	18.40	18.53	18.48	18.66	18.45
	5m	18.73	18.82	18.79	19.05	18.72	18.73	18.64	18.43	18.42	18.49	18.57	18.53	18.65	18.61
	底	18.83	18.83	18.86	18.85	18.82	18.86	18.76	18.74	18.61	18.55	18.72	18.75	18.71	18.65
酸 素 量	溶 存 量 cc/L	0m	6.75	6.87	—	6.41	—	6.71	—	6.87	6.78	7.00	6.91	6.84	7.04
		2m	6.76	6.81	—	6.31	—	6.89	—	6.88	6.85	7.07	6.91	6.67	6.38
		5m	—	7.09	—	6.11	—	6.82	—	6.82	7.04	7.41	6.94	6.82	6.95
		底	—	6.95	—	6.54	—	6.69	—	6.53	6.79	7.08	6.76	6.77	6.79
	飽 和 度 %	0m	106.1	106.0	—	103.6	—	104.5	—	104.9	103.5	106.9	105.5	105.6	108.6
		2m	105.3	106.7	—	101.9	—	107.3	—	105.0	103.6	107.9	105.5	102.6	98.5
		5m	—	113.4	—	101.5	—	106.2	—	104.1	106.5	113.1	106.0	105.4	107.2
		底	—	110.1	—	102.5	—	103.9	—	99.7	103.7	108.1	104.3	105.1	104.8
P. H	0m	8.3	8.3	—	8.3	—	8.3	—	8.2	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	—
	2m	8.3	8.3	—	8.3	—	8.3	—	8.25	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	—
	5m	8.3	8.3	—	8.3	—	8.3	—	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	—
	底	8.3	8.3	—	8.3	—	8.3	—	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	—
プランクトン沈 澱量 cc		25.1	143.4	46.4	23.3	14.1	11.4	7.9	19.8	18.0	4.8	8.4	11.4	6.2	3.9
水	深 _m	11.0	10.0	7.0	17.5	25.2	21.8	16.1	20.0	11.9	10.0	18.9	11.2	23.2	6.6
水	色	6	—	7	6	6	—	—	6	7	6	—	7	7	7
透 明 度	_m	6.4	7.4	—	9.7	8.1	8.2	9.2	9.2	8.1	8.0	7.5	7.1	7.8	6.6<
波 浪	ウネリ	0—0	0—0	0—0	0—0	0—0	1—0	0—0	0—0	0—0	1—0	1—0	1—0	0—0	1—0
気 温	℃	13.4	12.8	—	12.6	—	—	—	17.7	16.6	15.7	14.6	—	15.7	14.5
風 向 力		0—0	0—0	0—0	0—0	0—0	SW—1	0—0	0—0	S—1	NW—2	N—2	W—1	0—0	NN—2
雲 量		10	10	10	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0
天 気		R	R	R	R	R	B	B	B	B	B	B	B	B	B

五ヶ所湾観測表

1958年2月22日施行 (三重県水産試験場)

◎ 五ヶ所湾の概況

水温は英虞湾と同様の海況で湾奥は変化なく、湾口部で2°C程度低温を示している。

塩素量は前回観測の五ヶ所湾では12.83‰の低下を示していたが今回は18.83‰と回復して湾全般に安定して来ている。

地 点		101	102	103	104	105	106	107
地 名		湾 口	宿	迫 間	内 瀬	船 越	五ヶ所	神 原
時 刻		9.20	9.50	10.05	11.20	13.15	13.35	14.55
水 温 °C	0 m	12.82	12.82	10.68	11.15	11.12	11.60	11.38
	2 m	12.82	12.82	10.78	11.05	10.95	10.90	11.38
	5 m	12.82	12.78	10.82	11.18	10.85	10.80	10.96
	底	12.65	10.88	10.80	11.15	10.72	10.57	10.65
塩 素 量 ‰	0 m	19.11	19.08	18.76	18.00	18.84	18.82	18.66
	2 m	19.16	19.15	18.89	18.07	19.00	18.92	18.94
	5 m	19.15	19.16	18.95	18.03	18.97	19.00	18.99
	底	19.16	19.01	18.95	18.13	18.93	19.01	19.05
プ ラ ン ク ト ン 沈 澱 量 cc/m ³		—	—	—	—	—	—	—
水 深	m	35.0	23.5	20.0	17.5	11.5	17.5	18.5
水 色		—	—	—	—	—	—	—
透 明 度	m	12.8	11.0	7.0	6.0	7.5	7.5	6.9
波 浪 ウ ネ リ		2—1	2—1	1—0	1—0	1—1	1—1	1—0
気 温	°C	12.4	12.5	14.8	15.4	14.8	15.2	15.5
風 向 力		NE—1	NE—1	E—1	N—1	SW—2	SW—2	SSE—1
雲 量		0	0	0	0	2	2	1
天 気		B	B	B	B	B C	B C	B

会 員 名 簿

役 員

(役 名)	(氏 名)	(職 名)	(住 所)	(電 話)
代 表 幹 事	佐 藤 忠 揚	佐藤養殖場代表取締役	伊勢市辻久留町	(伊勢) 3832
常 任 幹 事	山 本 文 栄		伊勢市岡本町	(伊勢) 2955
〃	阿 部 功	全国真珠漁協	伊勢市岩淵町真珠会館内	(伊勢) 4147
〃	久 米 村 優	〃	〃	〃
〃	白 井 祥 平	〃	〃	〃
〃	丸 山 明 郎	〃	〃	〃
運 営 委 員 長	安 田 勝 己	全国真珠漁協組常任監事	伊勢市岩淵町真珠会館内	〃
運 営 委 員 (兼)	中 村 文 彦	村田真珠専務取締役	伊勢市大世古町67	(伊勢) 3095
〃	永 井 信 也	御 木 本 真 珠	志摩郡浜島町多徳	(多徳) 1
〃 (兼)	堀 口 博	堀 口 真 珠	伊 勢 市 本 町	(伊勢) 2413
〃 (兼)	横 瀬 寛 一	富 士 真 珠	伊 勢 市 岩 淵 町	(伊勢) 2403
〃 (兼)	山 本 文 栄			
〃 (兼)	山 本 一 彦	共 栄 水 産	伊勢市二俣町218	(伊勢) 2872
〃 (兼)	山 本 清 哉	山 清 真 珠	志摩郡志摩町間崎	(志摩) 201
〃 (兼)	白 井 祥 平			
会 計 監 査	山 本 清 哉			
〃	堀 口 博			
会 計 幹 事	中 村 好 男	全国真珠漁協	伊勢市岩淵町真珠会館内	(伊勢) 4147
会 計 事 務	谷 太 一	〃	〃	〃

三地区連絡 委員長	中村文彦
〃 連絡委員	横瀬寛一彦
〃	山本一彦
海洋調査分科 会運営委員	白井祥平
〃	谷 たい
基礎研究分科 会運営委員	丸山明郎
〃	阿部 功
経営研究分科 会運営委員	横瀬寛一彦
〃	久米村 優
実態調査委員 会運営委員長	中村文彦
運 営 委 員	山本一彦
〃	山本清哉

特 別 会 員

国立真珠研究所	志摩郡阿児町賢島	(賢島) 72
県立三重大学水産学部	津市大谷町	(津) 3173
三重県水産試験場	志摩郡浜島町	(浜島) 16
県立水産高等学校	志摩郡志摩町和具	(志摩) 21
全国真珠養殖漁業協同組合	伊勢市岩淵町84の2	(伊勢) 4147
三重県真珠協同組合連合会	〃	(伊勢) 3652

会 員

(伊勢地区)

(氏 名)	(職 名)	(住 所)	(電 話)
太田金太郎	アサヒ真珠	伊勢市常磐町	(伊勢) 2466
猪野楠衛	猪野真珠	〃 本町	75
山本一彦	共栄水産	〃 豊川町	〃 3244
佐藤忠揚	佐藤養殖場	〃 辻久留町	〃 3832
佐藤文勇	〃	〃 〃	〃

浜	際	松	茂	真	和	真	珠		伊勢市岩淵町	(伊勢)	2501
山	本	善	作	帝	国	真	珠	"	岡本町	"	4545
南	比	佐	次	南	勢	真	珠	"	宮後町	"	3522
岡	本	利	和			"		"	"		
堀	口		博	堀	口	真	珠	"	本　町	"	2552
中	西	留	雄			"		"	"		
鈴	木	俊	男			"		"	"		
溝	口		満			"		"	"		
横	瀬	寛	一	富	士	真	珠	"	岩淵町	"	2403
中	村	文	彦	村	田	真	珠	"	大世古町67	"	3095
森	田	好	哲	村	田	真	珠	"	大世古町67	"	3095
福	田	郁	夫	明	光	真	珠	"	黒瀬町191		
山	本	文	栄					"	岡本町	"	2955
鈴	木	彦	治	鈴木製核所				"	岡本町	"	3769
羽	山	和	雄	羽山製核所				"	船江町		
高	石	啓	三	三笠製核所				"	岡本町	"	3769
西	川	安	吉					"	河崎町		

(浜島地区)

柴 原 三 宥 三 陽 真 珠	志摩郡浜島町浜島	(浜島)	161
梅 谷 柳 平	〃	〃	
柴 原 得 定	〃	〃	
柴 原 平 一	〃	〃	
柴 原 昭 平	〃	〃	
西 飯 信 次	〃	〃	
柴 原 一 嘉	〃	〃	
上 村 留 太 郎	〃	〃	
竹 内 寿 二	〃	〃	
柴 原 芳 栄	〃	〃	
中 村 住 次 郎	〃	〃	
柴 原 善 晃	〃	〃	
谷 水 長 太 郎 浜島真珠玉組合	〃	〃	9
青 木 駿 富士真珠研究部	〃 迫子	〃	141
山 川 太	〃	〃	
永 井 信 也 御 木 本 真 珠	〃 多徳	〃	1

(自宅) 伊勢市岩淵町

(伊勢) 2639

御木本真珠研究部

御木本真珠養殖部

御木本真珠海事部

井上武平	志摩郡浜島町浜島	(浜島)	51
井上友久	〃	〃	67
井上貞信	〃		
岡本利二 ま る と し	〃		
大西啓司	〃	〃	114
小坂源栄	〃	〃	47
柴原康雄	〃	〃	71
谷水仙吾	〃		
豊永光司	〃	〃	252
中村恒太郎	〃	〃	144
中村清代	〃	〃	159
村田健治	〃	〃	67
山本楠郎	〃	〃	56

(越賀地区)

井上太市 井上物産	志摩郡志摩町越賀	(志摩)	300
村田謙治	〃	〃	
井上啓晴	〃	〃	
鷗丹谷実 鷗丹谷真珠	〃	〃	112
	(伊勢市吹上町)	(伊勢)	5634
磯和幸三 双葉真珠	志摩郡志摩町越賀	(志摩)	27
磯和春治 丸和真珠	〃	〃	508
吉田吉之助	〃	〃	149

(御座地区)

竹内満太郎 南島真珠	志摩郡志摩町御座	(御座)	21
竹内清喜夫	〃		
竹内金右衛門	〃		
竹内千吉郎	〃		
竹内利雄	〃		
竹内善雄	〃		
竹内万藏	〃	〃	13

田 中 克 己	志摩郡志摩町御座	(御座)	41
中 村 清 文	〃		
中 村 樹 生	〃		
西 井 一 彌	〃		
西 尾 嘉 雄	〃		
三 橋 長 寿	〃		
森 田 源 二	〃		
森 下 三 代 重	〃		
山 本 金 一	〃		
山 本 菊 男	〃		
山 本 世 樹	〃		
山 本 彌 寿 彦	〃		
山 口 泉	〃		

(和具地区)

蔭 間 喜 代 治	蔭 間 真 珠	志摩郡志摩町和具	(志摩)	106
蔭 間 政 男	〃	〃	〃	
浜 口 秀 司	蔭 間 真 珠	〃	〃	106
城 山 己 喜 利	〃	〃	〃	
浜 口 弘	〃	〃	〃	
竹 内 真 祐	新 日 本 真 珠	〃	〃	107
松 浦 鉄 郎	堀 口 真 珠	〃	〃	26
松 平 久 幸	〃	〃	〃	
浜 口 浩 平	和具真珠協同組合	〃	〃	459
山 本 善 吉	山 善 真 珠	〃	〃	204
石 原 博 祐		〃	〃	67
岩 城 周 次		〃	〃	257
大 山 幸 光		〃	〃	311
大 山 真 次		〃	〃	136(呼)
鈴 木 勝 次		〃	大山幸次方	
田 辺 耕 治		〃		
東 山 良 助		〃		
堀 口 秀 夫		〃	〃	139
森 島 常 実		〃	〃	258
矢 田 佐		〃	〃	135(呼)

(間崎地区)

山 本 乾	英虞湾真珠協組	志摩郡志摩町間崎 伊勢市宮後町92	(志摩) 266 (伊勢) 2577
中 島 佐 久 男	岩 常 真 珠	志摩郡志摩町間崎	(志摩) 207
島 野 清	帝 国 真 珠	〃	
山 本 清 哉	山 清 真 珠	〃	〃 201
山 本 繁	〃	〃	〃 202
山 本 達 二	山 楠 真 珠	〃	〃 212
岩 城 利 平	〃	〃	〃 256
岩 城 甚 也	〃	〃	〃 214

(布施田地区)

宇 田 健 二	新 光 真 珠	志摩郡志摩町布施田	(志摩) 126
中 村 松 次	太 洋 真 珠	〃	〃 129
大 森 武 寛	〃	〃	〃
加 藤 重 行	〃	〃	〃
田 畑 克 己	田 畑 克 己 工 場	〃	〃 55
平 田 玉 太 郎	〃	〃	〃 55
田 畑 忠 良	田 忠 真 珠	〃	〃 57
田 辺 時 生	中 又 商 店	〃	〃 307
松 崎 宗 之	南 勢 真 珠	〃	〃 415
浦 口 房 之	布施田真珠養殖組合	〃	〃 460
坂 口 忠	〃	〃	〃
宇 田 剛		〃	〃 447
浦 口 岩 寿		〃	〃 53
田 畑 良		〃	〃 101
筒 井 英 式		〃	〃 338
西 岡 慎 藏		〃	〃 56
浜 口 佐 喜 男		〃	
浜 口 増 行		〃	
山 本 徳 次		〃	
山 岡 敏 夫		〃	〃 62

(片田地区)

松 本 慶 重	覚 田 真 珠	志摩郡志摩町片田	(片田) 38
佐 々 木 幸 祐	〃	〃	〃

浜口栄田中真珠	志摩郡志摩町片田	(船越)	34
浜口英文浜文真珠	〃	(片田)	62
平賀吉之助平賀真珠	〃	〃	146
平賀彌男	〃	〃	136
平賀清隆	〃	〃	133
山本澄男山五真珠	〃	〃	62
山本吉勝山吉真珠	〃	〃	45
奥村修	〃		
奥村安一	〃	〃	125
茶木和夫片田中学校	〃	〃	9
杉本吉男	〃		
竹内幸一郎	〃	〃	132
浜口庄一	〃	〃	52
浜野一郎	〃	〃	2
平賀哲也	〃		
福田寿臣	〃	〃	26
正井新一	〃	〃	33
矢倉長谷男	〃		

(船越地区)

糸川清心糸川真珠	志摩郡大王町船越	(大王)	332
龜山政一郎龜山真珠	〃	〃	322
山崎喜久三ぢがみや真珠	〃	〃	345
中村吉郎兵衛中吉真珠	〃	〃	315
井田伊作美日本真珠資材	〃		
田中正司富士水産	〃	〃	333
喜田進船越真珠組合	〃	〃	45
浦口重次	〃		
大田徳也	〃		
喜田信吾	〃		
小林康義	〃	〃	356
小山仲栄	〃	〃	345
山崎克己	〃	〃	409
山際新栄門	〃	〃	310
山際周士	〃	〃	378

山 際 啓 一	志摩郡大王町 船越	〃	311
山 崎 善 也	〃	〃	303
(波切地区)			
小 川 進	志摩郡大王町 波切	(大王)	35
川 面 清 信	〃		
城 山 伝 吉	〃	〃	46
天 白 長 末	〃	〃	130
谷 奥 平 雄	〃		
野 村 孝 男	〃		
橋 本 章 雄	〃	〃	28
橋 爪 寅 太 郎	〃		
(神明地区)			
青 野 欣 一 大 月 真 珠	志摩郡阿児町 賢島	(賢島)	32
中 北 宣 夫 神 明 真 珠	〃 神明	〃	54
島 村 俊 一 島 村 真 珠	〃 賢島	〃	2
島 村 昭 二	〃	〃	
清 水 泰 治 神 明 漁 協	〃 神明	〃	7
倉 知 正 信 極 東 真 珠	〃 〃	〃	39
福 田 雅 夫 鄭 旺 真 珠	〃 賢島	〃	29
三 橋 定 一 三 橋 真 珠	〃 神明	〃	28
岩 崎 照 光 山 勝 真 珠	〃 賢島	〃	69
関 伸 彦	〃 〃	〃	
根 本 半	〃 〃	〃	
坂 上 晋	〃 〃	〃	
大 畑 伝 次 郎	〃 〃	〃	13
大 井 田 正 和	〃 神明	〃	30
能 登 東 夫	〃 〃		
松 尾 潔 暁	〃 賢島	〃	16
森 茂	〃 〃		
(立神地区)			
加 藤 修 幸 加 藤 真 珠	志摩郡阿児町 立神	(立神)	7
川 面 孝 川 面 真 珠	〃	〃	46
谷 口 弘 谷 口 真 珠	〃	〃	50
浦 谷 達 治 朗 出 口 真 珠	〃	〃	44

原 条 晃	原 条 真 珠	志摩郡阿児町立神	(立神)	15
落 合 完 二	み つ わ 真 珠	〃	〃	3
大 西 一 郎		〃		
原 条 光 治		〃	〃	15
原 条 寿 雄		〃	〃	61
舟 戸 弘		〃		
松 儀 方 郎		〃	〃	31
向 井 初 雄		〃	〃	15

(鵜方地区)

加 藤 寛 治	加藤真珠養殖KK	志摩郡阿児町鵜方	(阿児)	23
山 本 治	〃	〃	〃	23
北 村 矩 克	北 村 真 珠	〃	〃	22
西 尾 歳 春	西 尾 真 珠	〃		
高 尾 研 二	み の る 真 珠	〃	〃	15
中 村 重 明	〃	〃	〃	
市 川 隆	〃	〃	〃	
渡 辺 宗 一	渡 辺 真 珠	〃	〃	77
渡 辺 実	〃	〃	〃	
高 橋 重 孝	〃	〃	〃	
三 橋 重 卓	〃	〃	〃	
上 紺 屋 隆 夫		〃	〃	
田 畑 甚 右衛門		〃		
下 村 民 男		〃	〃	161
西 崎 定 男		〃		
西 崎 浅 雄		〃		
西 尾 実		〃		
西 尾 富 成		〃		
西 岡 徳 藏		〃		
東 山 定 男		〃		
前 田 民 二		〃		
前 田 峰 松		〃		

(的矢地区)

中 山 豪 鏡 真 珠	鳥羽市浦村町	(鏡浦)	7
堤 十 一 共 栄 水 産	〃		

中	村	清	重				
浜	田	重	行	浜	真	真	珠
村	田	孝	行	浜	久	養	殖 場
阿	山	多	喜	也	佐	藤	養 殖 場
沢	村	正	淑		〃		
沢	村		博		〃		
笹	原	淳	一	富	士	真	珠
石	黒	啓	一		〃		
吉	川	公	介	堀	口	真	珠
永	井	治	三	郎			
西	村	弘	彦				

(五ヶ所地区)

東	菊	生	
岩	城	弘	
上	村	一	司
岡	本	守	正
岡	本	保	雄
尾	田	方	七
川	口	公	良
川	口	浩	市
川	村	武	治
幸	田		隆
幸	田	協	久
黒	谷	辻	夫
瀬	古	茂	也
瀬	古	二	郎
中	西	万	寿
中	村		薫
西	浜	明	夫
西	井	万	定
西	浜	正	一
中	津	嘉	郎
西	井		優
西	井	久	世

鳥羽市浦村町

〃	(鏡浦)	13
〃	〃	6
志摩郡磯部町の矢	(的矢)	3
〃	〃	
〃	〃	
〃 三ヶ所	〃	19
〃 〃	〃	
〃 的矢	〃	12
〃 〃	〃	1
〃 〃	〃	68

度会郡南勢町五ヶ所

〃	〃	
〃	〃	
〃	〃	

度会郡南勢町五ヶ所

〃 〃	(五ヶ所)	2
〃 宿浦	(宿田曾)	31
〃 〃		
〃 五ヶ所		
〃 〃	(五ヶ所)	37
〃 〃		
〃 中津浜	(五ヶ所)	32
〃 五ヶ所		
〃 〃	〃	123
〃 〃	〃	28
〃 〃	〃	132
〃 〃	〃	38
〃 〃	〃	24
〃 〃		
〃 中津浜		
〃 〃	〃	32
〃 〃		

西井隆司		度会郡南勢町中津浜	
橋川勝司		〃 五ヶ所	(五ヶ所) 24
林伸樹	西井善四郎	〃 〃	〃 24
林秀吉		〃 〃	
浜口克之		〃 中津浜	〃 32
浜田信治		〃 〃	〃
浜口三雄		〃 〃	
南尚克		〃 五ヶ所	〃 13
南徹		〃 〃	
南幸太郎	五ヶ所浦漁協	〃 〃	〃 101
山本富生		〃 〃	〃 8
山本嘉樹		〃 〃	〃 50
山本保司	橋川真珠	〃 〃	〃 78
山本五郎		〃 〃	
山本金夫		〃 〃	
山本三夫		〃 〃	〃 21
山本敬次		〃 〃	〃 127
山本猷一		〃 〃	
山本国也		〃 宿浦	(宿田曾) 27
吉岡四郎		〃 中津浜	(五ヶ所) 32
高野谷修		〃 五ヶ所	

(南海地区)

大畑真一郎	大畑真珠	度会郡南勢町相賀	(迫間) 7
大畑真男		〃 〃	
大畑栄三郎		〃 〃	(南海) 57
竹内武生		〃 〃	〃 13
田中喜美郎		〃 〃	〃 14
畑善亮		〃 〃	
畑勇三		〃 〃	〃 31
村田忠也		〃 〃	
村田忠一		〃 〃	
渡辺賢次郎	渡辺真珠	〃 〃	〃 29
上野孝		度会郡南勢町礪	(南海) 40
河口金三		〃 〃	〃 9

片出克海		度会郡南勢町礪	(南海)	52
辻本一郎		〃 〃	〃	33
中村忠臣	中 甚 真 珠	〃 〃	〃	34
中村吉治		〃 〃	〃	37
中村八郎		〃 〃	〃	32
浜口清		〃 〃	〃	54
伊勢谷正憲		〃 迫間	(迫間)	37
大下勇		〃 〃	〃 18(呼)	
北村一衛	北 一 真 珠	〃 〃	〃	5
竹内敏夫		〃 〃		
中北正平		〃 〃	(迫間)	18
道清庄一		〃 〃		
石谷為生		〃 〃		
佐藤正五		〃 〃		
城吉太郎		〃 〃		
山本栄一		〃 〃	〃	32
萩原忠	内 瀬 漁 協	度会郡南勢町内瀬	(穂原)	23
(阿曾地区)				
南元夫	古和浦漁協	度会郡南島町古和浦	(島津)	2
浜地節三	真和真珠	〃 道方	(槌柄)	43
村山満弘	堀口真珠	〃 神前		
新二郎	〃	〃 〃		
内山一彦	〃	〃 〃		
萩須朝文	みつわ真珠	〃 阿曾	(中島)	15
山本喜四郎		〃 〃	〃	54
山下功	村田真珠	〃 〃		
山下竜生	〃	〃 〃		
山川修佑	〃	〃 〃		
村田祐	〃	〃 方座		
浜地芳雄		〃 神前	(南島)	9
嘉正礼毅		〃 阿曾	(中島) 14(呼)	
橋本寿夫	堀口真珠	〃 神前		
(紀州地区)				
東良一		北牟婁郡長島町長島	(長島)	207
武岡条夫	牟婁真珠	〃	〃	277
入江光夫	入江真珠	〃	〃	379

速 水 修 速 水 真 珠
 奥 村 友 雄
 島 田 一 良
 平 本 久 夫
 三 久 保 敬 司 堀 口 真 珠
 木 場 直
 奥 村 幸 夫 み つ わ 真 珠
 家 崎 栄 次
 津 村 博 義 矢 口 浦 漁 協
 住 屋 己 之 助
 柳 長 次 郎
 植 村 文 雄 植 村 真 珠
 和 泉 卓 司
 稲 守 浩
 三 鬼 松 藏 三 木 浦 漁 協
 川 上 定 文 九 鬼
 橋 本 恒 一 帝 国 真 珠
 森 田 浩 行 須 賀 利 共 同 真 珠
 (和歌山地区)
 平 松 文 一 東 洋 真 珠
 三 橋 道 弘
 石 野 政 吉 日 本 真 珠
 浜 田 良 一 田 辺 湾 真 珠 漁 協
 中 島 正 吉
 岩 月 良 行 紀 伊 真 珠
 堀 修 二 郎 第 一 真 珠
 (四国地区)
 富 永 健 堀 口 真 珠
 石 田 信 正
 本 田 耕 造
 黒 田 進
 野 村 勇 村 田 真 珠
 松 本 弘 志 幸 之 浦 真 珠
 大 矢 保

北牟婁郡海山町引本浦 (海山) 61
 //
 //
 //
 // 矢口浦
 //
 // (海山) 145
 //
 北牟婁郡海山町矢口浦 // 45(甲)
 //
 // 11(乙)
 //
 //
 //
 尾鷲市三木浦町 (北輪内) 9
 // 九鬼町 (九鬼) 6
 // 三木浦町
 // 須賀利町 (須賀利) 26
 和歌山県西牟婁郡白浜町 (白浜) 41
 //
 // 田辺市新庄町 (田辺) 1652
 // 江川町 // 2150
 //
 // 堅田町
 // 日高郡由良町吹井
 愛媛県北宇和郡吉田町白浦
 宮本幹一郎方
 // 吉田漁協気付
 //
 //
 //
 // 東宇和郡豊海村狩江
 広島県大竹市小方町阿多田島
 // 安芸郡江田島町幸之浦

(九州地区)

花 沢 栄 一	みつわ 真 珠	大分県佐伯市片神
下 遠 重 正	太 洋 漁 業	長崎市元船町1の3
井 岡 豊 助	大 屋 真 珠	長崎県北松浦郡鹿町町大屋
藤 博	熊 本 真 珠 漁 組	熊本県天草郡松島町大字阿村
矢 野 主 税	明 光 真 珠	熊本県牛深市久玉中之浦
茂 野 邦 彦	宮崎県沿岸漁業指導所	宮崎県延岡市土々呂町洲の鼻
藤 原 辨 止	玉 之 浦 漁 協	長崎県南松浦郡玉之浦町
上 村 治		長崎県壱岐郡郷ノ浦町
沖 田 吉 之 助		〃 西彼杵郡西海村横瀬郷
西 村 清 太 郎	西 村 真 珠	〃 〃 亀岳村亀浦
八 木 原 晴 之	岩永謙吉養殖場	〃 〃 西海村丹納郡
楠 木 三 徳	琴 海 真 珠 漁 組	〃 〃 村松村村松郷390の1
八 木 原 祐 計		〃 川棚町新谷郷
国 分 八 郎 太		〃 下県郡豊玉村卯麦
岸 本 恒 松		島根県周吉郡西郷町中町

(神戸地区)

宇 田 鉄 二	神戸市灘区篠原本町5の6	(8) 9936
舌 古 梅 次 郎	〃 生田区中山手通1の70	
宮 内 徹 夫	大阪市都島区都島本通	

(東京地区)

山 本 宗 夫	ア サ ヒ 真 珠	東京都新宿区須賀町
---------	-----------	-----------

(其の他)

福 本 洋	愛知県春日井市宮町寺八山57の2	平田方
市 丸 陽 太 郎	神奈川県真鶴町1582	
山 口 菊 男	瀬 洞 漁 場	沼津市西浦大瀬

編 輯 後 記

○毎月の事乍ら、15日になると誌面がうづまらず、青息吐息で業務も手につかぬのが現状である。

早くこの苦しみから解放させて頂きたい。

○そのために苦肉の策で、今月から会員の投書欄を設けたから、これ丈位は毎月うづまる様に意見を送つて下さい。

○役員名簿中、地区幹事の決定が遅れているので、来月号に発表する事にしました。御了承下さい。(S)

昭和三十三年四月発行

第三卷 第一号 会報 (非売品)

編輯者 白 井 祥 平

三重県伊勢市岩淵町八四番地ノ二

真珠会館内

発行所 真珠研究会伊勢部会

電話(伊勢局代表)四一四七番

三重県伊勢市岩淵町一四〇

印刷所 神都印刷株式会社

電話(伊勢局)二二三〇番